

# ヴァイオリンを作る

毎回このコーナーでは、オーケストラで使用される楽器を取り上げて紹介していますが、今回はちょっとひと休み、趣向をかえてヴァイオリンを製作する現場をご紹介します。実は埼玉フィルには、趣味でヴァイオリンを作っている団員が二人もいるのです。彼らに教えてもらった話から、プロの楽器職人とはまたちょっと別の視点(?)から、ヴァイオリンの製作現場に迫ってみました！



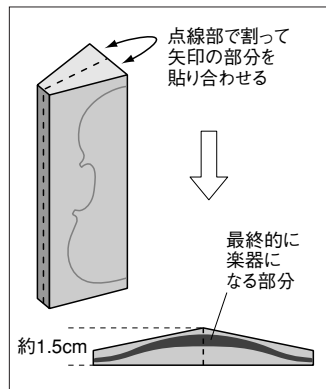
今日も自作の楽器で演奏します！



これが材料。立て掛けてある黒い棒がパフリングに



こんな道具を使います 右上に立ててあるのが型枠



板はこう使います

ヴァイオリンの本体は言ってもまえば木の箱。でも、もちろん木工の時間に作るような単純なものではありません。表も裏も平らではなく丸みを帯びていますし、側面はカーブしています。さてこの“箱”、どうやって作るのか……？

ヴァイオリンなどの弦楽器は、表板(弦のついている側)はスプルースというモミのような木から、その他の部分はカエデ(メイプル)で作られています。ヴァイオリン作りはこれらの木を削ることから始まります。もちろん木にも良し悪しがあって、良い楽器になる木は材木状態でもたたくとよく響くいい音がするそうです。

最初に作るのは側面の部分(横板)です。まず分厚いベニア板などで楽器の型の枠を作ります。これが楽器の基本の形になります。ここに横板を張っていきます。横板は1ミリほどの厚さに削ったあと、熱した金属棒などを使って型枠に沿うように熱で曲げていきます。削り出しているわけではないんですね。横板は上部のふくらんだ肩の部分、真ん中の凹んだウエストの部分、下の丸くふくらんだ部分で分かれ、左右は別ですから計6枚のカーブさせた板を接着します。接着面をピタッと合わせるのは、なかなかの技術が必要です。これが出来上がると、今度は表

板と裏板を作ります。左下の図のように伐られた材料の木を、点線部で2枚に割って、矢印の部分にかわで接着します(1枚の板から作る楽器もあります)。これを削りだして表と裏の板にするのですが、ここに難関が。ピタッと貼り合わせるために接着面をかんなで平らにしていくのですが、これがなかなか難しいのです。うまくいかずに削りすぎて、サイズが足りなくなって楽器が作れなくなっちゃったなんていう失敗談も。無事接着できたら、ひょうたんのような楽器の形にカットして、あとはどんどん削っていきます。最終的には厚さ2~4.5ミリくらいにしていくのですから、相当、削ります。裏板のメイプルは硬いのでとくに大変です。材料のうちのほとんどがゴミになると言ってもいいくらいで、削りカスは知り合いのハムスターを飼っている人に菓箱用にあげると喜ばれたりします。こうして、美しく響くようにカーブをつくっていくのです。

削っているときに面白いのが、最初はただの板なのが、削っていくうちにどんどん“響く板”になっていくこと。楽器なのだから響くのは当然の話なのですが、ノミで削る音もかなりうるさくなってきます。いちばん響くところまで削ったところで削りは終了です。

ところで弦楽器は、よく見ると縁のところに細く黒い線が引かれているんです。これは実は描いているわけではなく、細い板が埋め込まれているのです。パフリングと呼ばれるいわゆる象嵌(ぞうがん)です。削り終わった表板と裏板に、それぞれこのパフリングを張っていきます(あとから張るやり方もあります)。深さ・幅ともに1.5ミリほどの溝を彫って細い木を埋めていくのですが、これが難しく、とくに右上の写真のところが角のところは、別々に埋めていく木が合わさる場所で、ピタッと合わせるのは至難の業です。表板にはさらにf字孔という穴をあけ、裏側にバスバーという梁(はり)のような棒を取り付けます。バスバーは弦の振動(響き)を表板全体に伝える重要な役割を果たします。

こうして表裏の板が出来上がったら、さきほどの横板に貼り付けます。接着はすべてにかわを使用します。うまくくっつけば、本体の基本的な部分は完成です。

さて今度は周辺部分です。ネックといわれるいわゆる棹(さお)の先には、渦巻き型のスクロールという装飾が施されています。これは単純に飾りなので、名手とよばれる人の楽器でも雑な作りだったりしますが、なかには天使や獅子頭、観音様から果てはカノジョの顔を彫ったなどという話もあるそうですが、このへんの細工からは器用さがうかがえそうですね。

ネックが出来上がったら本体に取り付け、ニス(漆)を塗ります。まず透明な下地を塗り、そのあと色つけのため数種類のニスを塗り重ねていきます。この色つけに何を塗るかによって楽器の色が決まるのですが、黄色系ならサフラン、赤だったらドラゴンズブラッド(“龍

の血”)という真っ赤な樹液などさまざまな原料を溶いて使います。

ニス(漆)が乾いたら、指板という弦を指で押さえる部分の黒い板(黒檀が使われる)やあごあて、弦を張るためのさまざまな部品等を取り付け、魂柱(こんちゆう)という棒状の柱をf字孔から楽器の中に入れて立て、弦を張れば楽器の完成です。

製作にかかる期間は、趣味でコツコツやっている場合には数か月から1年ということもあるとか。こうして苦労して作った楽器は、見た目が多少よくなかったとしても愛着もわくし、何より音が、数十万円の市販の楽器よりもよく響くこともあるそうです。

ところで、なぜ自分で楽器を作ろうとまで思ったのか? 「買える値段で気に入った楽器がなく、本を読んだら『できそう!』と思った」「お気に入りの楽器製作者のところに見に行ったら誘われて」と理由はそれぞれですが、木工や工作が好きだったというのは共通点。お二人とも職人の先生に習ったそうですが、手とり足とりではなく、宿題のように「では次はここまでやってきなさい」というふうにして教わり、あとは本を読んだりして自分で工夫しながら覚えていきました。その間に道具も増えていき、最初はふつうのカンナや彫刻刀を使っていたのが、今では左ページの写真のようにたくさん。ちなみに道具は木を彫れば大工さんのものでもOK。ただし、よ〜く研いであるので指を切っても。そうして作った楽器は5本、6本と増えていき、今日のステージの響きの一部分としてみなさんのお耳にも届いているはずですよ。どうです、みなさんも楽器を作ってみたくありませんか!?



パフリングを張っているところと 接合部の拡大写真



これが響きの伝導役のバスバー



スクロールを削り中



ネックを取り付けて本体は完成



ニス乾燥中 出来上がりまであとひと息!